

平成19年度 企業内家庭教育学習講座（フォーラム）

## 積水樹脂(株)滋賀工場

テーマ「社会みんなで「こころ」を育む営みを



期日 平成20年3月3日（月）

時間 午後1時30分～2時30分

会場 竜王町大字鏡731-1 積水樹脂(株)滋賀工場・カンファレンスホール

滋賀県家庭教育協力企業協定制度締結企業

対象 社員35名

講師 滋賀県教育委員会事務局生涯学習課課員(中川・近藤)

### アイスブレイキング（リラックス）3分

《子どもと楽しめる簡単な遊びの紹介》

あと出しじゃんけん ホイ ホイ たい たこ ゲーム（最後に行く）

笑顔で「こころ」ほぐし

ガツガツしたものがない自分をつくりだす

人と...同僚と...夫婦間で...子どもと向き合うとき

日本人として、「こころ」を育むため大切にしてきたもの

人間に課せられてきた規範として、最重要の道しるべとなる言葉

「殺すなかれ、盗むなかれ、偽るなかれ」

日常茶飯の自然なライフスタイルを大切に習慣化していく。

食育の奨励・「早寝・早起き・朝ごはん」運動

生きるための知恵（価値観）

日常茶飯のライフスタイルが定まると...

社会や他人の付き合い方がさらに広がり、深まる 湖北地方のオオボについて

子どもって？

・「子どもがなかなか思うように育ってくれない、困っている」(母親の相談)

・「どういう子どもに育てほしい？」

参加者に何人が尋ねる。

・今ある子どもの良さを認めることから始めてみては？子どもを否定的にみないこと。

- ・子どもは、相手のことを考える能力が育っていないから、自己中心的。  
でも、それは自己主張ができる証拠
- ・子どもは、未来を予測する能力が未発達だから、失敗する。  
でも、失敗によって学習する
- ・子どもは、人の意見を冷静に聞く能力が育っていないから、言うことを聞かない。  
でも、それは自立心の表れ  
家庭という場所を見なおそう  
子育てはみんなの手で
- ・子どもを「育む」というとき、2つの側面がある。  
子どもを伸ばす。  
そのためには子どもの思いによく耳を傾ける。  
子どもをしつける、生活の基本的な習慣を身につけさせる。  
そのためには「我慢」や「辛抱」をすることを教える。  
大事にされているという体験、それが信頼の基礎
- ・家庭での「育み」は人生のすべての出発点
- ・子どもは生まれてすぐに親を中心とする家族のなかで育つ。
- ・寝ること、起きること、食べること（おはしの持ち方）、トイレの使い方など生活習慣の基本を家庭で学ぶ。
- ・人との接し方、かかわり方などの基本も学ぶ。
- ・親やまわりの人たちが幼児のふるまいに、えらく大げさな表情や身ぶり手ぶりで応じるのは、親（保護者）は文字どおり子どもの鏡になって子どものこころを創っている。  
学校という場所を見なおそう  
学校は社会性を身につける場所
- ・子どもが自分とその家族以外の人とはじめて深く交わる場所である。
- ・子どもにとってはじめての「社会」との出会いの場。
- ・他人を思いやる、あるいは他人の立場に身をおくという、社会的な「倫理」や「ルール」の基本となる資質を身につけていく。そういう意味では、人とのかかわりのあり方の基本をきちんと身につけさせることも、学校の大事な役割。  
子どもたちは、大人たちの声の届くところで生活するというよりも、学校という閉じた空間で1日の大半の時間を過ごす。
- ・本来家族による子育てにおいて解決すべき問題をも含め、子どもにかかわるさまざまな問題が学校という場所に持ち込まれる事が多い。
- ・閉じた集団では、自由な関係よりも、むきだしの序列づけや排除や差別が起こりがち
- ・「いじめ」も出口や逃げ場所のない、閉じた集団のなかで起こる。だから、子どもの集団にも、きちんと外の風が入るようにしておくことが大切。  
3 / 3 付け中日新聞より「夜回り先生の記事」
- ・子どもたちの集団に、教師が、あるいは地域の大人がかかわっていく、そういう隙間を開いておく必要ことも必要ではないか。  
学校をもっと開いていこう
- ・学校という場所は、社会の歪みがじかにどんどん入り込んでくるところで、そこから子どもを守るということも大切。社会の荒波にじかに揉まれるのではなく、それから距離をとって社会のあるべき姿、まちがった姿をきちんと区別し、社会を改善していく力を養う場所でもある。
- ・けれども、だからといって、学校を内に閉じた場所にしてはならない。
- ・「育み」は学校だけに任せきりにすべきものではなく、社会のみんなが担っていかなければならないもの。  
人びとのつながり ~ 地域にできること、地域がしなければならないこと ~  
子どもが自然に育つ場
- ・今の子どもは、家庭と学校と塾を往復するだけで、あるいは自分たちだけのたまり場にたむろするだけ、地域における「社会」の経験に大変乏しい。
- ・見知らぬ、あるいはちょっとだけ見知っている異世代の他人と個人的な会話をする機会も乏しい。

- ・子どもが「自然に育つ」ための条件は、家族や友だち以外の人とのかかわりがあってこそそのもの。
- ・かつての社会にはまだ、子どもが勝手に育つような「場」があったが、そういう「自然に育つ」場所がきわめて少ない。

みんなで協同して事にあたる力を

- ・住民が協同で事にあたるということが少なくなり、身近な人の生老病死に協同してあたることも少なくなる。
- ・子どもたちもまた地域社会で十分に揉まれることもないままに、それぞれの家庭から、そして学校から、いきなり公的空間へ、つまりは社会に出る、いきなり本番。  
現代社会における「育む」を考えるときのいくつかのポイント  
思いどおりにならないこと
- ・現代社会では、多くの人が、「自由」を「物事が思いどおりになること」とはき違えているように見える。

- ・社会生活においては、「自由」には必ず「責任」が伴い、人が行使する「権利」には必ず「義務」が伴う。

苛む「自分自身」への問いかけ

- ・「自分はいったい何者なのか」「わたしは何のためにここにいるのだろうか」といった問いに対して、現代は、社会というものがあまりに大きく、複雑なものになり、その前で人は個人としての無力をよりリアルに感じがち。
- ・社会という大きな枠組みのなかで、それを担うのが別の人でもよいということか。
- ・けれども、そのなかで人がなすべきこと、取り組んでみることはまだまだたくさんあり、ひとりの人間が真剣に取り組めば達成できることもとても大きいことに、ぜひ気づいてほしい。

野球選手としてメジャーに挑戦した野茂投手の話

- ・子どもたちがそうしたふさいだ状態からもっと広々とした場所へと出ることができるように、わたしたちは、この世界は子どもたちが想像しているよりももっと広いこと、そこには想像しているよりももっと多様な仕事や生き方があることを、しっかり伝えなければならない。

情報社会という環境

- ・果たしてそれで世界は広がったのか。
- ・子どもまで携帯やインターネットを駆使できるようになったのに、皮肉なことにコミュニケーションはどんどん内向していくばかり。
- ・相手の様子、特に顔色や姿勢、雰囲気や身ぶりなどへの臨機応変の対応とか、押したり引いたりといった関係のやりとりなど、コミュニケーションの基本となることを、幼いうちに十分に習得しないまま成長。

まとめ

- ・いつの時代も、子どもは大人を見て育つ。
- ・そのために、広く世界に目を向けて、「いい大人だなあ」と大人自身が思える人々を発見し、その生き方を伝えるよう努めましょう。
- ・地域のなかの人目にはつかないけれども、心のこもった地道な活動をしている人「輝く大人」「がんばっている大人」の姿をわたしたち自身を見つけ、それを子どもたちに伝えるよう努めましょう。
- ・子どもたちのこの「こころの育み」のために、わたしたち一人ひとりにできることから始めましょう。

- ・コップいっぱいの水



【平成20年3月3日（月）まとめ】